

# 日本人英語学習者の中間言語にみられる L1 の痕跡<sup>(1)</sup>

山 内 真 理<sup>(2)</sup>

内 田 充 美<sup>(3)</sup>

## 1. はじめに

本研究の目的の一つは、日本人大学生が産出する英語を分析し、彼らの初期段階の中間言語に見られる日本語の統語的特徴の影響を同定することである。4 年計画の研究の初年度にあたる2010年度は、ライティングデータの利用方法の整備とコーパス設計を進めながら、授業内外の活動を通して学習者のアウトプットデータを収集し、日本人大学生の中間言語の特徴についての仮説を立てることを目指した。

本稿では、2010年度の授業実践およびデータ収集の概要を述べた上で、これまでに収集されたデータの分析結果を報告する。

## 2. 2010年度を取り組み

### 2.1. 授業外活動によるデータ収集

データ収集のための学習活動は、千葉商科大学（CUC）と大阪府立大学（OPU）の2大学で並行的に行った。それぞれ独自のシラバスのもと、異なる教科書を用いた授業であるため、主に授業外（教室外）での活動とした。

普通教室で授業を行いながら、教室外でのライティング課題を実践していくために、LMS である Moodle を使用した。Moodle が実装している多数の活動形態のうち、Forum 機能を採用した。これは、2009年度までの予備調査の結果、ここでの目的に最も適切な活動形態であると判断したためである<sup>(4)</sup>。

授業外英作文活動のために、共通トピックを設け、両大学のそれぞれの Moodle サイトで Forum を設定した。用いたトピックは以下のとおりである：「夏休みの印象的なできごと」「学園祭（冬休み）をどのように過ごす予定ですか」「お気に入りの映画は何ですか」「家庭でのクリスマス・年末年始の習慣」「海外旅行をしたことがありますか」「今までどんな本を読んできましたか」「コンビニの24時間営業についてどう思いますか」「もし携帯電話がなかったらどんな不便があると思いますか」。2つのトピックのいずれかを選択する、というパターンを含めて、6つのフォーラムとした。Forum では、受講生どうしが、おたがいの作文に「返信」を行うことができる点が特長である。自分の投稿した作文に、

(1) 本稿は、2011年6月12日に行われた The Asian Conference on Language Learning 2011での発表内容に手を加えたものであり、科学研究費補助金基盤研究(C)（課題番号22520573）の成果の一部である。

(2) 千葉商科大学商経学部。

(3) 大阪府立大学 第1学群 人文科学系。

(4) 一般的な課題提出を目的とした Assignment 機能が主たる比較検討対象であったが、Forum では(1)受講生どうしの相互活動が生まれる点(2)受講者間での健全なピア・プレッシャーを創出できる点を評価した。くわしくは内田・山内（2011）を参照。

翌週にはクラスメイトから「コメント」がつけられる、という仕組みを通じて、受講生間に横のつながりが生まれ、擬似的な英語によるコミュニケーションの場が成立した。授業外活動の場合には、参加者のモチベーションをいかに保持するかが大きな課題となりがちであるが、たとえこのような擬似的なものであっても、双方向的な活動の仕組みは、学習者の参加意欲を刺激する効果があると考えられる。

## 2.2. データの抽出と管理—学習者コーパスの構築に向けて

授業運営・学習活動管理のために、Moodle には便利な機能が備えられており、Forum 上での活動をモニターするにあたっては、教師の目的に応じて、トピックごとに受講者の活動を見わたしたり、受講者ごとに活動状況を追うことが可能になっている。受講者に時機を得たフィードバックを行うために利用するなど、日々の授業においてさまざまな活用が可能である。

しかし、本研究の主目的である学習者の作文の収集のためには、より応用が利き、後の段階で加工しやすい形式でのデータ抽出を行う必要がある。将来的には、各種データベースソフトウェアや表計算ソフトで利用できる、タブ／コンマ区切りのテキスト形式で必要な情報を一括抽出することが必要不可欠になる。現在は、専門家に協力を仰ぎ、このためのツールを構築するべく模索中である。今回のパイロットスタディにあたっては、Moodle システム管理者の力を借り、両大学 Moodle 上の当該科目のバックアップファイル（特殊な xml 形式）から、必要な情報をテキスト形式で取り出してもらうという手順を踏んだ。それによって、千葉商科大学「英語1D」からは約5,700語、大阪府立大学「英語 B2」からは41,000語の作文データを分析対象資料として得ることができた。

取り出した資料を適切なデータベース（コーパス）として管理し、指導に活かしていくことが本研究の掲げる目標のひとつであるが、コーパスデザインの策定や、観察対象とする統語的特徴の絞り込みを同時進行で行う計画のもとに研究を進めているため、現段階ではデータベースの全体像が明らかになっていない。このため、今回のパイロットスタディでのデータ分析では、表計算ソフト上にデータを貼り付け、個々のデータを目で読み、手作業で特徴ある現象にタグ付けを行っていくという、最もシンプルな資料管理方法を採用した。

## 3. 日本語の統語的特徴の影響

外国語学習者が、母語の言語的特徴を、可能な限り「借用」しようとするのは自然なことである。言語差が大きい場合は、目標外国語の学習が進み、中間言語が発達するにつれ、母語の特徴の「借用不可能性」が分かってきて、借用が起こらなくなっていく（Corder, 1992: 27）。

日本語と英語は言語差が大きく、特に統語的特徴は類似しているとみなせるものが少ない。すなわち、英語使用において、日本語の統語的特徴は、概して「借用」しにくい。とはいえ、中間言語が未発達な段階では、伝達したい内容に言語力が追いつかず、母語で使えそうな特徴は借用しようとする。ただ「借用不可」の判断が甘いため、間違った英文ができてしまう。

こうしたエラーに注目し、どのような統語的特徴がどのように「借用」されているかを、

整理・分析するのが本研究の目的の一つである。

2010年度のライティング課題からのデータの観察の結果、現時点では、日本語の統語的特徴の影響が強く示唆されるものとして、以下のようなエラーが同定されている（表1）。主題／主格、品詞／述語項構造、ゼロ照応は、比較的「借用」が起こりやすい特徴と言える。以下で、具体例をあげながら、これら日本語の統語的特徴の影響が、どのような「英文」の産出につながるかを見ていく。

表1 エラータイプおよびエラーを含む投稿件数

エラータイプ	CUC140件	OPU532件	計672件
(i) 日本語の主題（Xは）ないし主格名詞句（Xが）を英語の主語に対応させる (i)' 主題・主格マーカーとして、be 動詞を使う	24 (19.4%)	28 (5.3%)	52 (7.7%)
(ii) 日本語の品詞・述語項構造を、英語にあてはめる	17 (12.1%)	50 (9.4%)	67 (10.0%)
(iii) 既知情報への言及を省略する（ゼロ照応）	6 (4.3%)	10 (1.9%)	16 (2.4%)

CUC：5694語，724文，140投稿；1 投稿あたり約5.17文，約40.7語

OPU：40931語，4616文，532投稿；1 投稿あたり約8.81文，約76.9語

### 3.1. 「Xは（が）」の借用

日本語の主題（「Xは」）ないし主格名詞句（「Xが」）は、条件さえ整えば、英語の主語に対応させることが可能であり、日本語の特徴の中では比較的「借用可能性」が高いと言える。(1)～(3)は、述語の品詞別に、日本語の主題題述と英語の主語述語の対応関係の概略をまとめたものである<sup>(5)</sup>。

(1)	私は 主題	従兄弟と野球をした 題述（動詞句）	I 主語	played baseball with my cousins. 述語（一般動詞句）
(2)	彼は 主題	とても忙しい 題述（形容詞句）	He 主語	is very busy. 述語（be + 形容詞句）
(3)	彼らは 主題	素敵な夫婦だ 題述（名詞句 + (だ)）	They 主語	are a nice couple. 述語（be + 名詞句）

前述のように、この対応関係は常に成立するわけではない。以下の条件が満たされない場合、対応関係はくずれ、「借用不可」となる。

#### (1') 動詞句どうしの対応条件<sup>(6)</sup>

(5) 「は」と「が」の違いにはここでは立ち入らない。「が格」名詞は主題ではないが、英語の主語との対応条件は、主題の場合と同様であると考えている。

(6) なお、日本語の題述内部の語順（動詞が最後に来る）をそのまま借用する例がほとんど見られないのは、英語との語順の違いが明確であり「借用可能」と認識されにくいためであると考えられる。

- ① 同様の内容を，日英とも動詞述語で表現する
- ② 日英の動詞が類似の項構造をもつ
- (2') 形容詞句どうしの対応条件
  - ① 同様の内容を，日英とも形容詞述語<sup>(7)</sup>で表現する
  - ② 日英の形容詞が類似の項構造をもつ
- (3') 名詞句どうしの対応条件
  - ① 同様の内容を，日英とも名詞述語で表現する
  - ② 日本語の主題名詞と題述中の名詞が，同じ範疇に属する事物を指す

中間言語が未発達な段階では，「借用不可」の判断が甘いため，(1')～(3')の条件を満たしていない場合にも「借用」が起こり，結果としてエラーにつながる。(1')，(2')は別の要因とも関わるため後述することにし(3.3)，ここでは，(3')の名詞句どうしの対応条件に関わるエラーを見ておく。各例（下線部）に，意図されている日本語と正しい英文を付記している。なお，文中の縦線は主題・題述の切れ目を表している。

- (4) a. Our team | was the third place. The last team had to received a punishment game, so I felt relieved.  
 私たちのチームは | 3 位だった  
 (Our team was in third place. / Our team took third place.)
- b. I | 'm also hard schedule.  
 私も | ハードスケジュールだ  
 (My schedule is tight too.)

(4)は，異なる範疇に属する物事について，すなわち，(4a)では「私たちのチーム」とそのチームの順位である「3 位」，(4b)では「私」とその状態である「ハードスケジュール」について，英語の「主語 + be + 名詞」構文を用いている。「借用不可」であるはずの「XはYだ」構造を借用したためのエラーである。

- (5) a. But your grandparents are very nice couple! When I read your sentences, I | became a smile.  
 私は | 笑顔になった  
 (When I read your post, I smiled. / Your post made me smile.)
- b. I played baseball and volleyball with my cousin. I | became muscular pain.  
 私は | 筋肉痛になった  
 (I had a muscle ache. / I got sore muscles. / My muscles became sore.)

(5)は「～になる」という動詞述語の対応物として *become* を選択しているが，「XはYになる」と *X becomes Y* (Yが名詞の場合) の対応関係にも，(3')と同じ条件が関わる。

(7) ここでいう形容詞には，国語文法で「形容動詞」と呼ばれるもの（日本語教育では「ナ形容詞」とも呼ばれる）も含む。

(5a)の「私」とその表情である「笑顔」、(5b)の「私」とその身体状態である「筋肉痛」について、*X becomes Y* 構文を用いることはできない。

このように、主題題述構文は、一部、英語の主語述語構文に対応するケースがあるため、比較的「借用」されやすい。しかし、ここで示したように、特に対応関係の成立条件が厳しい「*XはYだ*」(*X, Y*は名詞句)の借用は、結果的にエラーにつながることが多い。「*XはYだ*」をそのまま *X be Y* にうつしかえる(あるいは「*XはYになる*」を *X become Y* にうつしかえる)と英文にならない、という知識は学習の早い段階で身につけるべきだと思われる。

「*XはYだ*」の借用は、「*Yだ*」に相当する英語が形容詞の場合、(6)、(7)のような品詞使用のエラーにもつながる (cf. 3.2)。(6)では、日本語では名詞である「金持ち」「驚き」に相当する表現として選ばれた *rich, surprising* が、本来は形容詞であるのに、名詞であるかのように扱われている。

- (6) a. I'm a rich. (私は金持ちだ)  
b. This is a surprising. (これは驚きだ)

(7)は、日本語の「*Yだ*」が「名詞+だ」ではなく、形容動詞(いわゆる「ナ形容詞」)であるケースだ。この品詞の違いを意識していない日本語話者は、「重要」「必要」「自信過剰」に相当する英語表現として、誤って名詞を選ぶ可能性がある<sup>(8)</sup>。

- (7) a. Mobile phones is very importance. (携帯電話はとても重要だ)  
b. Convenience store of 24 hours is necessity. (24時間のコンビニは必要だ)  
c. I'm overconfidence. (私は自信過剰だ)

ここまで、日本語の主題題述構文が、英語の主語述語構文に対応するため、比較的借用されやすいこと、しかし、そのうち「*XはYだ*」構文は「主語+*be*+名詞述語」構文との対応条件が厳しく、借用がエラーにつながりやすいことを確かめた。

以下では、形容詞句および動詞句に関わるエラーに移る前に、主題題述構造の借用の「進んだ」例として、*be* 動詞が主題マーカである「は」の対応物として扱われるケースを見ておく。

### 3.2. 主題マーカとしての *be* 動詞

主題題述構造を借用するだけでなく、さらに、*be* 動詞を主題マーカである「は」の対応物として扱っているように見える例がある。このようなエラーが生じる場合、学習者は、以下のような対応関係を作って「は」を借用していると考えられる。

- (8) a. [ 彼 ] [ は ] [ とても忙しい ] → [ He ] [ is ] [ very busy ]  
b. [ 彼ら ] [ は ] [ 素敵な夫婦だ ] → [ They ] [ are ] [ a nice couple ]

(8) 英語における同語根の名詞形と形容詞形の品詞の区別がついていないためのエラーとも解釈できる。



「は」 = *be* という対応関係がはっきり見て取れるのは、(9)のように、対応する日本文「XはY (だ)」のXないしYが節をなしている場合である。

- (9) a. My favorite movie is Tonarinetotoro. I watched a movie is four weeks ago.  
The star is Satuki and Mei. Totoro looks like a big reccon dog. This movie is interesting.  
(私が映画を見たのは4週間前だ)
- b. I think that no mobile phone is unconvinient. Don't keep in touch old frend if not special occasion. I don't imagine it.  
(携帯がないのは不便だ)
- c. I agree with the round-the-clock of the convenience store. Because convenience store is various commodities are sold.  
(コンビニは様々な日用品が売られている)
- d. So, I want to go to Italy sometimes. Because I went to see the AMALFI movie. .... The story is a girl encounters a kidnapping, and a diplomat solves a case. The shore appearing for the movie is very beautiful.  
(物語 (で) は少女が誘拐に遭い、外交官が事件を解決する)

(9)のような *be* 動詞の使用(「は」の借用)は、表現したい内容にふさわしい英語の構文(たとえば(9')など)が使えないために起こっていると考えられる。(9')のような構文の知識がないか、アウトプット時に浮かぶほどには定着していなければ、日本語の構造に頼るしかない。

- (9') a. It was four weeks ago that I watched the movie. / I watched the movie four weeks ago.
- b. Having no cell phones is inconvenient.
- c. Convenience stores sell various commodities. / In convenience stores various commodities are sold.
- d. In the story, a girl gets kidnapped and a diplomat solves the case. / The story is about a girl who gets kidnapped and a diplomat who solves the case.

このように、日本語の「XはY (だ)」という構造は、XとYに様々な言語要素をとりこむことができるため、(9'a)~(9d')のように多様な英語の構文に対応するエラーが生じうる。このような誤った借用が見られた場合、定着を防ぐ手当が必要だろう。

### 3.3. 品詞・述語項構造の借用

3.1で触れたが、(1)、(2)のように動詞や形容詞を中心とする述語の場合、同じ内容が、日英語双方でたまたま同じ品詞を用いて表現され、しかも似たような項構造をもつ場合でなければ、日本語の構造の「借用」はエラーにつながる(対応条件(1')(2')を参照)。

たとえば、「Xはかわいそう」という文をそのまま“X is sorry”にうつしかえると、(10)のように間違った英文が生じる。「かわいそう」と *sorry* は意味役割の異なる項を要求するからである。すなわち、「Xはかわいそう」におけるXが感情を引き起こす対象であるのに対し、“X is sorry”では、Xは感情主体である。*sorry* を用いるならば構文を変える必要がある。

- (10) It is very sorry you can't stay with your family on Christmas.

クリスマスに家族といられないのはかわいそう

(It's a pity that ... / I feel sorry that ...)

これに関して、日本語のもう一つの統語的特徴に注目しておく。日本語では、感情や感覚を表現する形容詞類が述語となる場合、しばしば、感情主体も感情を引き起こす事象も、どちらでも「Xは」の部分に生じうる（例：「私はこわい／それはこわい」「私は不安だ／それは不安だ」）。このため、形容詞に応じた主語を選択しなければならないという英語の特徴に気づきにくかったり、習得が難しくなっている可能性がある。たとえば、*I'm busy* という表現を知っていても、「『私は忙しい』が*I'm busy*になるなら『正月は忙しい』は*New Year is busy*になるだろう」と拡大解釈することは十分にありえる。(11)はこのような形容詞類に関わるエラーの例である。

- (11) a. Every year, I went to two hometown, so the new year is very busy.

正月はとても忙しい (I am very busy during the New Year's holidays)

- b. Because I'm not good at get up early, I'm hard to go to school every Thursday morning.

私は学校に行くのが大変だ (it's hard for me to go to school)

- c. It is uneasy for me that there is no the cellular phone.

携帯がないのは不安だ (I feel uneasy if I don't have my cellular phone. / I feel uneasy about having no cell phone.)

さらに、類似の意味内容が、日英で異なる品詞で表現される場合、あるいは、学習者がそもそも意味の類似した単語の品詞の違いをあまり意識していない場合は、(12)に示すようなエラーにもつながる。(12a)の“New Year is very enjoy”は、「正月はとても楽しい」から得られた「X be 形容詞」という構造に、意味内容の近い既知の単語 *enjoy* をあてはめたものと思われる。(12b)～(12d)でも、まず日本語の「Xは+形容詞類」から「X be 形容詞」の構造を得ている。その上で、「楽しい」「うらやましい」「残念だ」に対応する形容詞を選んでいのだが、*enjoyable*, *enviable*, *regrettable* は感情主体を主語にとらないため、間違った英文になってしまっている。(12e)では、「私は驚いた」の通りに、*surprised* を動詞として扱った可能性がある<sup>(9)</sup>。

(9) 単に *be* 動詞を落としただけという可能性もある。

- (12) a. New Year is very enjoy.  
正月はとても楽しい  
(New Year's holidays are fun.)
- b. When we rode many roller coasters ..., we were so enjoyable than we imagined.  
沢山のジェットコースターに乗って、(私達は) 思ったよりずっと楽しかった  
(we enjoyed ourselves much more than we expected.)
- c. I'm enviable that you have a friend in Beijing.  
北京に友達がいるなんて (私は) うらやましい  
(I envy you for having a friend in Beijing.)
- d. I want to listen to music that "Touhoushinki" are singing live, but I am regrettable because they have suspended their activity.  
彼らが活動を休止したので (私は) 残念だ  
(I regret that they have suspended their activities/it's a pity that ...)
- e. I surprised that Nagano's air was so clean!  
私は長野の空気があまりにきれいで驚いた  
(I was surprised that the air was so clean in Nagano.)

述語の項構造の違いが意識にのぼりにくいとすれば、(13)のような同一の動詞から派生した分詞形容詞の混同が頻繁に起こるのも当然かもしれない。

- (13) a. There were a lot of stone steps in "Konpira-san," climbing it was very tired.  
それを登るのはとても疲れた  
(climbing the steps was very tiring / I was very tired from climbing the steps)
- b. This match ended in a 2-2 tie after all. ... We were very exiting!!!  
私達はとても興奮した  
(We were very excited. / The match was very exciting.)

まとめれば、「Xは(が) + 感情・感覚を表す述語」の構造の借用は、少なくとも以下の点からエラーにつながりやすいと言える。

- ・日英で類似の意味内容を表す語は、品詞ないし述語項構造が一致していない場合が多い。
- ・日本語のこの種の形容詞が題述部にくるとき、感情主体も感情を引き起こす事象もどちらも主題になれるため、英語の形容詞それぞれの述語項構造の違いが、意識にのぼりにくい。

### 3.4. be 動詞＋一般動詞原形

ここで、be 動詞の誤用例としてしばしば言及される「be 動詞＋一般動詞原形」のパターン(投野 2007, 山梨県総合教育センター 1998)を見ておこう。本研究でも、*is excites*



*me, isn't drink, is sounds good, am enjoy, am agree, am belong, am join, am prefer* といった例が観察されている。そのうちいくつかを(14)にあげておく。このタイプのエラーについては、まだ分析が進んでいないが、3.1~3.3で見えてきた特徴を含めていくつかの要因が関わっているのではないと思われる。

- (14) a. When I was two grade of junior high school, I went to Thailand. I experienced many things in here. For example, Thai's water isn't drink, it is different from that of Japan. I don't know it. So I remember having a stomachache during this travel.
- b. I'm agree with convenience store of 24 hours. .... If it should be emergency, It is useful. ... I think convenience store of 24 hours is necessity.
- c. Now I'm working in cake shop one a week, and I always get some cakes for free. So I have gained the weight recently. I'm belong to "the settlement club". This club hold a meeting every Wednesday and we go to the institution where many children live every Saturday. I like to take care of children, so I joined the club.
- d. I like summer vacation. Because summer vacation is very long. I'm enjoy summer vacation with my friend. And do I a part-time job. I'm a rich.
- e. I have read a lot of books. .... I like comic books very much. Because comic books is excites me. I will keep reading a lot of books.
- f. My favorite movie is Neko no ongaeshi. This movie is produced by Studio Jiburi. .... In last, Heroine is grow up. She learns many things in the event.

(14a)の“Thai's water isn't drink”は「タイの水は飲めない」という意味であろう。“In Thai, tap water isn't for drinking (isn't safe to drink)”や“In Thai, you shouldn't drink tap water”といった構文が浮かばなかったために「タイの水は飲めない」という日本語の主題題述構造を借用したものと考えられる (cf. 3.1, 3.2)。

(14b)の“I'm agree with ...”は、「私は ... に賛成だ」という構造と対応していることから、*agree*を動詞として扱っていないのではないと思われる。最後の文の“... is necessity”（「... は必要だ」を意図している）にも品詞の混同が見られる。(14c)の書き手は、“I'm belong to ...”以外では様々な動詞形を使いこなしており、動詞の変化形を把握していないとは考えにくいことから、*belong*を「... クラブに入っている」という状態を表現する形容詞と扱っている可能性がある (cf. 3.3)。

(14d) (14e) (14f)は、それぞれ「夏休みを楽しむ」「私をわくわくさせる」「成長する」という動詞表現に対応していると思われる。*be* 動詞 + 動詞の原形という形がありうると思っているのであれば、これらの*be* 動詞は「は」の代わりかもしれない (cf. 3.2)<sup>(10)</sup>。

(10) 韓国人英語学習者の中間言語にも同様の *be* 動詞の誤用がみられ、これを不完全な動詞類とみるか、主題・主語マーカーとみるかは議論の分かれるところである (Ahn 2006)。

### 3.5. ゼロ照応の影響

最後に、もう一つの日本語の統語的特徴である「ゼロ照応」について触れておく。ゼロ照応とは、既出名詞への言及を省略すること（ゼロ代名詞を用いて照応すること）である。たとえば(15a)では、 $\varphi$  の位置で「私は」が省略されており、(15b)では、 $\varphi^1$  で「その漫画は」が、 $\varphi^2$  で「私は」が省略されている。

- (15) a. 私は MAJOR を読んだ。この漫画は面白くて  $\varphi$  感動した。  
b. 私は MAJOR を読んだ。 $\varphi^1$  面白くて  $\varphi^2$  感動した。

ゼロ照応が頻繁に用いられるのも日本語の主要な統語的特徴の一つである。その影響で、英語では代名詞照応にすべきところを、代名詞を明示せずゼロ照応にしてしまう誤りがしばしば見られる。(16)のような目的語の省略よりも、主語の省略の方が起こりやすいが(3例 vs. 16例)、文頭の主語が省略されることはない。(17)に示すように、いずれの例でも主語が省略されるのは接続詞の後である。

- (16) a. His novels are very interesting and I often read  $\varphi$ .  
彼の小説はとても面白くて、私は  $\varphi$  しょっちゅう読む  
(His novels are very interesting and I often read them.)  
b. my favorite movie is “the bucket list.” i have seen  $\varphi$  many times.  
私の大好きな映画は “The Bucket List” だ。私は  $\varphi$  何度も見た。  
(My favorite movie is “The Bucket List.” I have seen it many times)
- (17) a. I like MAJOR too. Goro is freshman. The manga is very interesting and  $\varphi$  impressed.  
その漫画は面白くて  $\varphi$  感動した  
(The manga was interesting and I was impressed.)  
b. I had worked part job in summer vacation. .... And  $\varphi$  went to grand mather’s house. It was very fun.  
私は夏休みにバイトをした.... それから  $\varphi$  祖母の家に行った。  
(I worked part-time during the summer vacation. And I went to my grand mother’s house.)  
c. I have begun kyudo since  $\varphi$  entered this university.  
私はこの大学に入ってから  $\varphi$  弓道を始めた  
(I began practicing kyudo after I entered this university.)  
d. I sometimes try reading books, but I give up before  $\varphi$  finish reading them.  
私は時々本を読んでみるが、 $\varphi$  それらを読み終える前にやめてしまう  
(I sometimes try reading books, but give up before I finish reading them.)  
e. Reading an estimated 50 books is hard, but  $\varphi$  may be happy for book-loving you.  
約50冊の本を読むのは大変だけど、 $\varphi$  本好きのあなたには嬉しいかもね

(Reading about 50 books sounds like a lot of work, but it may be a pleasure for a book-lover like you.)

日本語ではゼロ照応はごく普通の表現手段であるため、(17)にのせた日本語対訳には、当然のことながら不足感はない。(17)のような英文を産出する際に、このような日本語を頭に浮かべているとすれば、学習者自身で「この英文には何か(=主格名詞)が欠けている」と気づくのは難しいかもしれない。

(18)は、主格名詞のゼロ照応が埋め込まれた節の中に生じている例である。上例同様、対応する日本語の方には不足感は感じられない。(18a)は不定詞構文で意味上の主語が欠けている例であり、(18b)は関係節中で主語が欠けている例である。( )内は、それぞれ主格名詞を補った英文である。ただし、(18b)は、正しくは“... gives you a chance to become positive”とすべきである。

- (18) a. And we go to shrine and pray  $\phi$  to be a good year.  
そして私たちは神社に行き、 $\phi$  良い年になるようにと祈る  
(And we go to the shrine and pray for the new year to be a good one.)  
b. This movie gives the chance that  $\phi$  can become positive.  
この映画は、 $\phi$  前向きになれる機会を与えてくれる  
(This movie gives a chance that you can become positive.)

このゼロ照応と主題題述構造の借用が重なると、(19)のような英文も生じる。もちろん、述語動詞の項構造も意識されていない。補うべき主格名詞は、(18b)と同様、人々一般を指す *you* である。

- (19) a. This movie can sympathize.  
この映画は共感できる  
(This movie is something you can sympathize with. / It's a movie **you** can sympathize with. / You can sympathize with this movie.)  
b. Thai's water isn't drink. (= (14a))  
タイの水は飲めない  
(In Thai, **you** shouldn't drink tap water.)

このように、日本語であればゼロ照応が自然になるような伝達内容の場合、それを英語で表現した時(特に学習者にとって比較的難しい文の中では)、無意識にゼロ照応を利用してしまふ可能性がある。主題題述構造の借用が重なると、適切なものとはかけ離れた英文を産出してしまふことになる。ゼロ照応は、日本人学習者自身が「省略している」とは意識していない可能性があるという点でも注意を要する。

#### 4. まとめ

3節では、2010年度のライティング課題のデータで観察されたエラーの中で、①日本語

の主題／主格，②品詞／述語項構造，③ゼロ照応の「借用」（ないし影響）をまとめた。

①については，日本語の主題述語構造と英語の主語述語構造が対応可能になる条件を整理し（(1')～(3')を参照），特に「XはYだ」構造（X，Yは名詞）が借用可能になる条件が厳しいことを確認した。②については，「Xは（が）＋感情・感覚を表す述語」という構造が，品詞や述語項構造が日英で一致していないために借用可能性が低いことを確認した。さらに，日本語の感情・感覚の表現の述語項構造が両義的であるために，日本人学習者にとって，この構造が借用不可能であるという判断が困難になる可能性があることを指摘した。③については，「省略している」という意識をもたずに，日本語の場合と同様にゼロ照応を使ってしまう可能性があることを指摘した。

ここであげたエラーの例の多くは「日本語的発想」あるいは「直訳風」の英文とみなされるだろう。一方で，かなり日本語に依存していても，動詞を文末に置いたり，文頭の主語を省略したりといった「直訳」は起こりにくい。日英の違いが明確で借用不可であると判断しやすいためであろう。逆に言えば，日本語の特徴が借用不可であると気づいていない場合に「日本語的発想」や「直訳風」の英文が生じる，とも言える。この点を意識した言語対照的認識を促す指導が必要であると思われる。

指導という観点から3節の例(9b)を再度とりあげたい。“I think that no mobile phone is unconvinient.”という文は「もし携帯電話がなかったら，どのくらい不便でしょうか」という質問に対して書かれたものである。下線部が，否定主語文ではなく，「携帯がないのは不便だ」を意図しているのではと思いいったのは，本研究の過程で，主題述語構造の借用および主題マーカーとしての *be* 動詞の使用の可能性に気づいた後だった。英語教員は強く意識していない限り，どうしても「英語」として読もうとする。伝達意図を読み取って有効な指導を行なうためには（この例では *unconvenient* を訂正するだけでは効果は期待できない），どのような日本語の特徴が「借用」されやすいか，その結果どのような「英文」が生成されるかといった知識が，教師が参照しやすい状態で蓄積・整理されていることが望ましい。

2節で触れたように，現在，仮のタグをつけつつ，エラーの範疇化を進めている段階である。本論で同定した特徴および分析が十分にできていない特徴についての検討を行いながら，データ収集と蓄積を続けていく計画である。

## 参考文献

- Ahn, Sung-Ho. (2003). A note on the topic-comment stage in Korean EFL syntactic development. *Studies in Generative Grammar*, 13(2), 369-382.
- Ahn, Sung-Ho. (2006). The Grammar of Verb *Be* in Early Korean EFL Interlanguages. *Studies in Generative Grammar*, 16(4), 797-809.
- Corder, Pit. (1992). A Role for the Mother Tongue. In Gass, S.& Selinker, L., (Eds), *Language Transfer in Language Learning*, John Benjamins, pp.18-31.
- Ellis, Rod and Barkhuizen, Gary. (2005). *Analysing Learner Language*. Oxford University Press.
- Gass, Susan, and Selinker, Larry. (1994). *Second language acquisition*. Lawrence

- Erlbaum.
- Granger, S., J. Hung and S. Petch-Tyson (Eds.) (2002). *Computer Learner Corpora, Second Language Acquisition and Foreign Language Teaching*. John Benjamins.
- Kim, Kitaek. (2011). Overgenerated *be* from Topic Marker to Verbal Inflection. In *Selected Proceedings of the 2009 Second Language Research Forum*, ed. Luke Plonsky and Maren Schierloh, 70-81. Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project. [www.lingref.com](http://www.lingref.com), document #2525. 閲覧日：2011.6.20.
- Odlin, Terence. (1989). *Language Transfer: Cross-Linguistic Influence in Language Learning*. Cambridge University Press.
- Sasaki, Miyuki. (1990). Topic prominence in Japanese EFL students' existential constructions. *Language Learning*, 40(3), 337-368.
- Selinker, Larry. (1972). "Interlanguage." *International Review of Applied Linguistics*, 10, 209-232.
- Sinclair, J. M. (Ed). (2004). *How to Use Corpora in Language Teaching*. John Benjamins.
- 田中彰一. (2011). 言語理論と英語教育－第一言語の影響をどう捉えるか－. 『佐賀大学文化教育学部研究論文集』 15(2), 39-51.
- 投野由紀夫. (2007). 『日本人中高生一万人の英語コーパス 中高生が書く英文の実態とその分析』 小学館。
- 内田充美・山内真理. (2011). 持続可能な学習者コーパスの構築を目指して. 『言語文化学研究 (英米言語文化編)』 第6号, 71-88. 大阪府立大学人間社会学部言語文化学科。
- 山梨県総合教育センター. (1998). 高校生の「読むこと」「書くこと」における英語コミュニケーション能力に関する実態調査研究. [http://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu\\_kiyo/pdf/26kou\\_eigo.pdf](http://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu_kiyo/pdf/26kou_eigo.pdf) 閲覧日：2011.6.20.
- Yamauchi, M., Uchida, M., and Kojima, A. (2011). Detecting the influence of L1 syntactic patterns on Japanese EFL learners' Interlanguage grammar. The Asian Conference on Language Learning 2011. 2011年6月10日～12日. 大阪.

## [抄 録]

### 日本人英語学習者の中間言語にみられる L1の痕跡

#### L1 traces in the interlanguage of Japanese learners of English

本稿は、科学研究費補助金基盤研究「英語習熟度の低い日本人大学生の間言言語に見られる借用を分析するためのコーパス構築」（課題番号：22520573）における2010年度の研究成果報告の一部をなす。Moodle を利用した授業内外の活動からのアウトプットデータの収集およびデータ管理の概要を述べた上で、これまでに収集されたデータをもとに、日本人大学生の間言言語に見られる日本語の統語的特徴の影響について論じる。取り上げる統語的特徴は、「主題／主格」、「品詞／述語項構造」、「ゼロ照応」である。これらの特徴が、英文産出時にどのように「借用」され、結果としてどのような「英文」が産出されるかを示す。この3種の特徴は、広い範囲の英語の構文エラーにつながる可能性があり、「借用不可」であることが判断できるよう、言語対照的認識を促す指導の必要性が示唆される。